

中國人の中以下の常食としては高粱である。高粱の粉で饅頭の様にして蒸した餅を作り、之が濫かい内に生葱など嚙りながら此高粱パンで食事をするのである。かくて中國人の下層社會では一日の食費拾錢を出ないとの事である。そして彼等は終日を忠實に倦むこともなく働き續けて、得たる處は大半以上貯金することが出来る。私共が遼陽發掘で雇つて居た苦力達は皆近邊の人達で、日本人に使はれて居た者ばかりであつた。此人達は何れも無邪氣な可愛い性質で、眞面目によく働いてくれた。そして苦力はして居るが皆相當に貯へもあり豊かに生活して居る者であつた。

尙高粱の用途は非常に多い。先高粱酒を醸造することが第一の用途であらう、中國人の十中八九迄の人が高粱酒を嗜むと云つてもよい位である。最上の高粱酒は強い酒精の様に燃る。此地に永住して居る日本人間にもよく此高粱酒を飲んで居る人を見た。支那料理に高粱酒は調和のよいものらしい。

中國人の御馳走におよばれすると、其客人をもてなすことの巧なことにおどろくであらう。そして客人は思はず盃を重ねて居るのである。酒も高粱ばかりぢやない、色々の支那酒

がある。日本人は能く酔ひ潰れるが、中國人の酔拂ひは未だ曾て街上に見受けなかつた。

鄭家屯で高粱酒が一斤二十錢であるときいた。又高粱殻はアンペラに編まれて床の上に敷かれることは日本の畳と同じ用途を以て居る。屋根にも葺かれるし、其他色々の容器にも作られて居る。残されたるものは皆燃料とされる。支那家屋のオンドルは高粱殻十本一束のものを二三束で床は充分に心地よく温められる。

高粱に次いで眼に這入るものは大豆である。その外、粟がよく實つて居る。粟飯も高粱飯に次ぐ常食である。粟の用途もかなり多い。大連に行けば滿鐵の滿蒙資源館は決して見落してはならない。ここを參觀すれば館員の方々は親切丁寧に説明の勞を取つて下さる。滿蒙のあらゆる資源は一目瞭然であらう。私は此處で高粱や大豆・粟などの種類の多いのにおどろかされた。大豆は豆糟にされ支那素麵にされ、豆腐にも菓子にもなり油も取られる。

稗も食料として馬料として用ひて居る。稗を粉にして少しばかりのメリケン粉を交へ、之を大きく薄く丸くやわらかく焼いたものも下層社會の常食にされて居る。之にやはり生

葱を包んで食するもので、一日五六錢位で充分であると云ふ。玉蜀黍や柔らかい薩摩芋を蒸かしたものを賣りに来る、之等も食事の代用とされる。此外慢頭、麵類其他種々の食事がある。されば日本人より其主食物の範圍が廣く且つ自由である。

副食物には野菜と牛豚肉魚である。大連では色々の魚が漁れるし、内地からも来る、多く鯛・海老・鱸・鮪の類を見た。之等の魚は鐵道便で沿線の驛々に送られて来るから高價である。冬期は皆之等の魚も凍つて居る。無論肉も鋸で引く様に凍るのである。支那料理に用ひられる椎茸・干海老・竹の子・海鼠・鱻の鮭、其他罐詰類は皆内地から來て居る。滿洲では鯉・鮒其他の河魚がある。中にも中國の鯉料理は非常においしい。

野菜は實に豊富で能く出來て居る。瓜類をはじめ葱・人參・大根・白菜・蓬連草・芋類など盛に栽培されて居る。日本人も農場を持つて多くの中國人の農夫を使用して大々的にやられて居る方が大分見える、この様な方の仕事は皆成功して居られる。

野菜や肉・卵などは内地の人々にきかせれば皆羨ましい程安い、先東京の公設市場より五分一から十分一安いであらう。

果物も季節に應じて美しいおいしいものが多い。栗・柿・梨・葡萄・林檎・棗・さんざごなど種類が多い。葡萄は終りに出る白く長い形の種なしのものが最もすぐれて居る。金州から鞍山附近までの間に内地人中國人で林檎を盛んに植ゑて居て、近來は餘る程林檎が出るさうである。初めに出て來る大形の林檎はあまり味がよくない。そして早く腐り易い様であるが、後に出る小形の林檎は味も能く持もよい。

思ふに此様に林檎が多量に産出する様になると、將來は之を利用して、林檎酒とか林檎の砂糖漬、干林檎、林檎の甘露煮やジャムなど製造することは面白い事であらうと思はれた。まして砂糖が一斤拾錢位であることを思へば、内地よりも安價に製造が出来ることであらう。

此外雜貨類、綿布、絹布、毛織物類の多くは日本製のものが多い。商標が中華民國になつて居ても日本製はすぐわかる。特に雜貨の如きは日本人の店より中國人の店の方が二割方安價なものゝあるのは不思議である。聞くところによれば、上海あたりの資本主は自分の船を以て神戸大阪で根氣よく雜貨の仕入をするさうである、そして大口に買はれる爲に

日本の商人は少し位安くしても賣つてしまふ。中國人は其等を大量に仕入れて自分の船で上海に持歸り、それから四方八方に相當の利を見て小賣商人の手に捌いて行く。かくしても尙日本の商人の賣價よりも尙安くして利益があると云ふ事である。まだ驚く可きは日本製の煙草を定價よりも安くして賣つて居る事である。日本の商人はよつほと考へなくてはならない。此外に疊屋とか澤庵の漬物屋とか其他色々の職を、日本人に雇はれてすつかり覺えた職人は幾年かの後自立して、日本人の疊屋よりも安くしてお得意を求めある。澤庵漬も中國人の手で立派な大根を栽培して、此安い原料で澤庵漬を製造し、之を非常に安く卸して居るとすれば、内地から來る澤庵に一大打撃となる、これは一例に過ぎないが、もし萬事が此様な工合で進んで來ればと考へ及ぼすとき何だか空恐ろしいものがある。しかも中國人の商人や職人、農夫から苦力に至るまで、其勤勉さ商賣上手さはとても日本人の及ばない處がある。

私共が昨年十二月中頃、半年程蒙古の旅を終つて奉天に出て來た時の事であつた。二人共雪焼の赤い顔に裘を着け毛の帽子で日本町に買物に出た。大通の一つの大きな洋品店

の扉を押して這入つたが、多くの店の人は何も云はなかつた。チラと、こなたを見たりで「イラツシヤイ」とも聲をかけない、店の中で品物を見歩いたが「何かオ入用デスカ」も云はなかつた。

それから其近くにあつた小さい日本菓子屋に這入つて菓子を見たが、此店のおかみさんは子供を抱へながら私共の後から「マーズイブンハイカラサンニナツテ」と云つた。私共は日本語で菓子を買ひ始めたので、おかみさんは急いで奥へ這入つてしまった。此外二三の店に這入つて見たが何れも歓迎されなかつた。

之等を體驗して見て私はつくづく日本商人の爲に悲しみを覺えた。大に反省しなくてはならないのではないかと思はれた。

滿鐵沿線を離れて四平街驛から四洮線で鄭家屯を経て、通遼・開魯と進んで行くと段々蒙古になつて來る。此間は滿鐵沿線と同じやうに開墾されて居るが、處々荒地砂漠地が多くなり、土地は益々曠漠となつて來て、耕されない不毛の地が處々見られる。今年は幾十年目の降雨多量の爲に、遼河が氾濫した爲に農作物は残らず水に浸つて居た。鄭家屯から

通遼の間よりか、通遼から開魯の間の方がより多く耕されてあつた。そして此間は乗合自動車  
 動車が中國人の手によつて數臺往復して居て、大車で二日路の處を四時間で走つた。路は  
 凸凹で遼河は渡し船がある。歸り路には結氷して居て、氷の上を走るとは水を渡るより  
 遙かに便利であつた。

通遼も開魯も蒙古の中にある最も繁榮な支那街で、最近通遼の如きは、營口からの打通  
 線開通後物資も豊かで、鄭家屯より活氣のある街になつて居る。人口も四五萬はあらうか、  
 年々増加して行くさうである。通遼から奥地奈曼蒙古の地には大倉組の農場がある。そこ  
 には日本人、中國人、朝鮮人が數百人別天地の樂園を造つて毎日睦しく愉快に活動して居  
 られ、特に日本の若い婦人も夫を助けて此農場に活潑に働いて居られる方が數組もあると  
 の事を耳にして私共は非常に嬉しかつた。私共が通遼に着いた前日も一人の若い夫人が生  
 れた計りの赤坊を抱いて小車で農場に向はれたと云ふこともきいた。此健氣さを内地の有  
 閑婦人に見せたいものであると思ふ。

私共は今度の事變を聞いた時、此奥地の日本婦人達の事が先づ心掛りであつた。其後飛

行機で無事避難された新聞記事を見て私共は自分が救はれた様に喜んだ事であつた。

開魯も通遼に次いで榮えて居る。最も蒙古の土地にある最終の支那街で、此土地は東札  
 嚕特蒙古と、西札嚕特蒙古と、阿嚕科爾沁蒙古との三つの嚕の字のつく土地の境目を開い  
 て街を設けたので、開魯と名づけたと云つて居る。此街は光緒の宣統帝時代に朝陽、赤峰、  
 建平あたりから移住して來てから、今日の繁榮が生れたのである。街の城壁も民國十二年  
 に出來て居る。人口は約三萬もあらう、平和なそして相當に活氣のある街で、物資はやは  
 り營口から通遼を経て來ると云ふ。此街の南方で朝鮮人が水田を作つて米を栽培して居る  
 爲に、此街では案外米飯を食することが出来る。

鄭家屯をはじめ通遼、開魯では街上蒙古人を見ることが出来るのである。彼等は其風俗  
 それから歩きぶり、其顔を見れば誰にも直ぐ蒙古人と云ふことが一目で分る。

私共は中國人の宿屋で蒙古人が虐待されて居るのを見て氣の毒に思つたことがあつた。  
 然しこの街の商人は決して彼等を虐待しない様である、雜貨店などに買物に這入つた時、  
 如才のない中國人はお茶よ煙草よともてなしを忘れない、麻雀など持ち出して愉快に遊ば

せ、無論金錢をかけてわざと勝たせて機嫌をとり、然る後心持よく買物をさせて歸へしてやるなどの方法を取つて居ると云ふことをきいた。私共は之等の蒙古向の雜貨店に這入つて見たが、相變らずお茶よ煙草よともてなしてくれる。色々蒙古向の品物を見せてもらつたり買物もした。私共が二十五年昔に赤峰で見たものより、大分質が下落して居ると感じた。其割合に物價は高くなつて居た。

此邊に來ると果物などは珍らしいものになつて來る、野菜類も段々乏しくなり始める。

開魯から北に進む時相當食料品其他を買入れて行かねば、林西縣に到着するまで十日間は物賣る店などは一軒もなくなる。開魯の街を出離れると愈々曠漠たる平野になつて來る。然し相當に耕されて居て、高粱・粟・油麥それから蒙古米を多く見る様になる。阿魯科爾沁<sup>ナ</sup>蒙古の土地も中國人の手に依つて、其三分の一位は既に耕されてしまつたであらう。巴林蒙古の土地も同じく大方耕されて居ると云つていゝ位、王様所有の土地は收穫の十分の二を地主に納める様な規定になつて居た。巴林蒙古の方は寒さの爲に高粱が出来なくなつて來る。主として蒙古米、油麥粟などである。僅かに玉菜<sup>きやせつ</sup>とか人參、葱などを作つて居

る。巴林蒙古では蒙古米で酒を醸造して居る、城構の大きな中國人の家を見た。そして至る處に農業の成功者を見た。私共が二十五年見ぬ間に、內蒙古に三つの縣が出来て居る。

其は天山縣、林東縣、林西縣の三縣であつた。天山縣は阿魯科爾沁蒙古の天山の麓に置かれてあり、知縣衙門の家だけが建つて居るばかりで街はなかつた。林東縣は二三百軒位の人家であらう。林西縣は一番にぎやかで萬に近い人は住つて居るであらう。滿鐵經營の施療病院もあり、小橋さんが主任で友野夫妻が助けて居られた非常に街の信用が厚いと聞く、勸業公司の及川様も居られるし、日本人で一番奥に住つて居るのは此方々ばかりであらう。

林西の三十支里程東の方に黒山頭と云ふ村があつて此處には滿鐵經營の種羊場があり、數千のメリノ一種の羊や子羊を相手に内田所長をはじめ其下に血氣の日本青年の方々が數人働いて居られる。私共は林西と此處で皆様に隨分御世話になつた

施療病院と云ひ、種羊場と云ひ、この何事も不自由な蒙古の奥に活動して居られる方々に、敬意を表さなくてはならない。婦人は友野さんの夫人只一人で能く一同の方の面倒を見たり慰めたり勵ましたりして居られた。黒山屯の種羊場には内田所長をはじめ皆獨身の

方々のみであつた、然し夫人を迎へられても差支へない様に、新らしく毛氈ウッケキを敷結めた、オンドル式のお部屋が出来た計りの處であつた。此様な特志の方々の爲に蒙古の奥に来て内助の功を擧げようとする殊勝な日本婦人は居ないものか？と思つて居る。

種羊場のお仕事は仲々お忙しい、メリノー種の種羊を蒙古人や中國人に無料で貸付けて在來の蒙古種の劣等な羊毛を漸次改良して、その收獲を多量にと考へて居られるが、慾のない蒙古人達はあまり深く心にも留めないらしく、飼養法の注意も怠り勝で、從來の習慣の儘を續ける爲か、所員の方々は時々巡回して結果調べに行かれると種羊は斃れたから皮は賣り肉は食べたと云ふ者がまゝある。それでも根氣よく又貸してやられて其成績を見て居られる。反つて中國人の農家などで傍仕事に種羊を借りて熱心に改良に心掛けて居る者が多いと云ふ事である。

やがては此種羊場の努力で蒙古全體の羊は改良され、十數倍の羊毛を産出するやうになる事であらう。

而も毎日御忙しい中で昆蟲を集めて、小さい標本室を造つて居られるのは何よりうれし

かつた。之等は青年方の爲に非常に立派なお楽しみで、有益な研究資料としていつまでも残ることであらう。

然し事變の爲に全部引上げられた由を聞いて、あの千を以て數へる立派な可愛いメリノーの種羊は、あの昆蟲の標本は、如何にと私共は心にかゝる。

林西にはかなりの物資が赤峰縣の方から、張家口の方から、將た又通遼から、錦州方面からも這入つて来る。林西から五六支里西の方にカトリックの御堂がある、信者は皆中國人ばかりで、最近まで、白耳義人の宣教師が居られたが、今度中國人の宣教師と交代せられた。蒙古人は喇嘛教が盛だから信する者が一人もない。

この蒙古の奥にカトリックの御堂の出来て居ることは、二十五年前にこの邊を過ぎた時耳にして居たので今度訪問した。女學校もあり男學生も居た。信者は主に農業と牧畜で、この蒙古の奥に来て始めて開墾をしたのは、之等の信者達であると云つて居る。

私共は防寒具の總べてを林西の街で買つた。此街に賣つて居る羊毛の裘は皆蒙古人が牛乳で鞆したものであるから非常によいと云つて居る。

蒙古内地を旅行用の爲にと表布をつけないで皮の儘で着た、之はかなり重いもので温く大洋十二三元で買った。子山羊の毛皮で布をつけないで六七元位、之は軽いのできみの分とした。表に絹布でも着けて軽く柔かく着られる位の裘は三十元位の處で買へる、之に表布を着けて四五元と見れば間違ひはない。

今年には毛皮暴落の爲に蒙古人も皮商人も非常に困つて居た。林西の露國人の皮屋も閉店の憂目に遭つて居た。此人は自分の自動車を運轉して、烏珠穆沁<sup>ウヂムチン</sup>あたりに買ひ出しに行つて居たと云ふ。

食用の爲に買った羊が僅かに二元であつたのを見ても、どんなに下落したかが分る。二十五年前の方がもつと上値であつた様に思はれる。不景氣の風は蒙古の奥にまで吹き卷いて居るのであつた。當時日本金壹圓が洋銀二元に相當する。

ウスキーでこさへた靴下(五六十錢)それに綿入の支那靴(五六十錢)駱駝の毛を太く紡いで編んだ手袋(一元)同靴下(一元)毛の帽子(二元)之等は皆林西で求める事が出来る。

男子は洋服の上から裘を着る事が出来る。毛類の下着の上から綿入の支那ズボンをはき、厚いスエーダの上から裘を着る。之等の毛帽子・靴下・靴・手袋・裘で零以下二十五度や三十度の寒さは充分凌いで來たのであつた。乗馬の人は特に冷えるので毛氈で造つた膝頭を埋める位の長靴が入用である。

敷皮には狼や犬の皮が重寶される。山羊の敷皮が一番安いので私共は之を求めた。二尺五寸位の中で六尺位の丈に出來て居て、二元五十錢位で賣つて居た。山羊は毛が長いが注意しないと、毛の間の柔かい綿毛を全部抜き取つたものがある。此様なのは敷いて寝ても少しも温かくないから注意しなければならない。そんなのはもつと安いのである。

毛帽子では狐の皮の帽子が一番温かいが二三十元はする。蒙古の貉の皮などは高價なものである。之等も帽子に着ける。普通猫の毛皮の帽子などは安いので多く用ひられて居る。私共が買った黒猫の毛皮帽子は、染めてあつたと見えて兩鍰が眞黒く染まつた。山羊の長い毛皮で造つた凄いいものもあるが之等は安い。

蒙古人の平常着の裘の如きはとても重いもので、表布は大概着けない皮の儘を用ひ丈は

足が隠れる位長くして居る、常に之を帯で胸を張らして引上げてメて居る。夜はツボン一  
つになつて此裘を夜具代りに被つて寝て居る。婦人も子供も皆此様にして寝る。

蒙古人のテントへ這入つて座れば必らず二三匹の虱に這ひ着かれて居る。長い旅行中一  
行は誰か虱退治をして居るのを見ることは珍らしくない。

それから燃料であるが、開魯あたりまでは石炭を用ひて居る、オンドルには高粱穀もく  
べてくれた、蒙古風に牛糞や馬糞も集めて居るし柴も用ひる。私共の宿つた中華旅館では  
ストーブに石炭を盛んに焚いてくれた。

開魯から大車で急いで一週間餘で林西に達することが出来る。此間中國人や蒙古人の家  
に泊つて行く、中國人の居る所は馬料や食物には餘り困らないが、蒙古人の家に泊る時は  
非常に不快を覚える、二十五年以前の氣持ちと大變な違ひになつて來て居る。夜遅くなど  
やう／＼に蒙古村に辿りついても泊めてくれないで、凍つた地上にテントを張つて、焚火  
してやつと暖を取つたことなどは度々であるから、將來蒙古人の村を傳つて旅行しようと  
思ふ人は、どうしてもテントの用意と鍋や食器食料の用意が必要である。牛糞の燃料位は

くれる。彼等は最近勤勉な中國人の努力には打勝てなく、段々壓迫され興安嶺の山の方へ  
山の方へと移住しつゝあり、よほど貧乏して居る様子で昔の様に胡琴ホレイなど置いてある家さ  
へなくなつて居た。

此邊の人々の燃料は、牛糞・馬糞を主として用ひ、此外にガタと云つて杏の木アモイの根を掘  
りかへして使用して居る。二十五年以前にも喀喇沁蒙古で此ガタを炭に焼いて火鉢に用ひ  
て居るのを見た事がある。杏の根は蒙古人が昔から色々のものに細工をする、例へば胡琴  
の胴とか木椀モトスライガなどを作るのを見たことがある。

杏の根は非常に絡らんで拳のかたまりの様になつて居て、乾燥したものは火力が強い、  
林西あたりの日本人や中國人は盛んに此ガタを買ひ込んで置いて、冬期のストーブに焚い  
て居る、されば林西縣の三十支里四方には此ガタが根絶してしまつたと云ふ事である。ガ  
タの外に柴もあり、ワールマンハの方に一面に生えて居る柏の灌木をも多く切り取つて  
來て薪にして居る。

杏の木は興安嶺山脈の五百メートル位の高さ一帯に灌木の様に低く野生になつて居て、



六月頃は桃色の花を着けて、其時の眺めは蒙古でなくては見られない美しさである。杏の外、蒙古の花には芍薬・ネジアヤメ・麝香草・櫻草・アネモネ・野菊・堇・千島雛罌粟其外名前は知らないが数へきれない程四季の花は一時に咲き亂れる。草は萌え出て鳥は來鳴き家畜の乳は多く出る様になる。此時を喜び月と云つて居て、蒙古婦人の一番忙しい時で一年中の食料となるバター・チーズ・乳酒其他工肉の類を作つて貯へて置くのである。杏の木はまだく興安嶺山中に無盡藏に野生になつて居るが、かくてはいつかは根絶してしまふ時が來るのであらう。

此杏の實は杏仁劑になるので、蒙古人は毎年之を集めて中國人に賣つて居る。

蒙古の婦人は昔見た時と同じ様に、家畜の世話から、家事一切の事を掌つて居た。忙しい暇々には、家内の靴を縫つたり、テントの扉の厚い毛氈に馬の尾の糸で美しい紋様の縫取をして居る事は今日見て來た所同じ様で、相變らず婦人は皆活潑であつた。

私共がシラムレン河に架つて居る巴林橋を見に行つた時であつた。中國人の貧し相な一家族が、牛車一臺に僅かの家財道具を乗せて、赤峯の方面から巴林橋を渡つて移住して來

るのに出會つた。若い妻は赤坊を抱いて牛車の上に、父と長男とは徒歩で之に従つた。何處の地を卜して開墾を始るのであらう。彼等の勤勉努力が眼に見える様である。

大巴林蒙古を通過の時にも廣い平野の真中に、開墾を始めたばかりの移住者を見たが、一坪計の掘立小屋の上に僅かばかりの藁を葺いて屋根となし、穴の様な中に住つて居た。然し夫婦して早や一町餘りを耕し、蒙古米と麻など植ゑて收穫時であつた。犬も一匹飼つてあつた。

今一軒は移住して二三年位になる中國人を見るに、鶏數羽に、豚二三頭羊二頭を所持して居た。中國人の生活には豚と鶏はつきもののやうに何處の家にも豚と鶏の居ない所はない。此地方に移住して居る農家では、其成功の程度に従つて農業の傍蒙古風に家畜をも飼つて居る、林西の附近で見たもので牛馬を數千頭放牧して居るのを見て驚かされたのであつた。

小巴林王府は大巴林王府より富んで居るらしく、馬を數百頭放牧してあつた。蒙古人の富の程度は其家畜によつて明かである。蒙古人は一ヶ月の内に二三度は羊の食事をしない

と力が續かないさうである。然し蒙古人はいつも食物に乏しい様子でよく「お腹が空いた」と云ふことを耳にする。羊でも山羊でも肉を一ヶ月の内に幾度か食し得る蒙古人は富んで居る方で、それは家畜を一頭づゝ屠つて行かねばならぬからである。

昔見た蒙古人は、中國人を非常に卑しんで使用することを大變に嫌つて居たし、又使用して居るのをあまり見つけなかつた。然し今日では至る處の蒙古人の家庭に支那人を使用して農作物や家畜の放牧に従事させたり、婦人の務であつたウスキーの製造にも、中國人を使つて居るのを見た。中國人を使つて耕作するのは進んだ方である。

かくて腕一本のてぶらで移住して來た者でも、家畜の飼養法を知り、ウスキーの製造も覚え、四季を通じて蒙古の生活を知つた時、彼等はやう／＼羊二頭位から生活を始めるのである。中には蒙古婦人を娶つて蒙古語を話し、純蒙古風の生活をして居る者もあつた。一般に此邊に移住して來て居る中國人には、多少の蒙古語を話せる者が多い。蒙古人も亦支那語を皆話し得るのである。

私共は小巴林蒙古人の家に泊つた時、此處にはヅルスンゲルの丸い蒙古家が三軒とバイ

シンゲル（支那風の家）とがあつた、私共はバイシンゲル方に泊つた。其時隣の室で此家の主婦が中國人を使つてウスキーを製造して居るのを見た。

先始めに多くの刈り集めた毛を、綿打屋で用ゆる様な弓にかけて、之をほごしてから、箕子の上に平にして廣げ其上から霧を吹いて之を押へ付け又重ねて行く、恰も中心になる部分には黒い毛を缺みこんで、又表になる部分によい毛を重ねて又霧を吹いて押さへて居た。そして尺で必要の寸法に周圍の毛を折り込み、箕子でしつかりと巻き、重く押しをきかせておく。押しをきいた時出して乾かす。

かくして作られたウスキーは、部屋の敷物に多く用ひられる、蒙古人のテントは主に之で包み上に天窓を開けて、周圍は馬の尾の綱で縛りつけてある。テントの扉もウスキーで冬の靴下も此ウスキーで作られる。

蒙古人は此ウスキーの新らしいテントをチャガンゲル（白い家）と云つて豊な人の家を意味し、ハラゲル（黒い家）は貧乏人の家を意味して居るのである。ウスキーの純蒙古家は阿魯科爾沁、巴林には少ないが、烏珠穆沁に行けば總べてウスキーのテントで、阿魯科

爾沁や巴林あたりの蒙古家は、ヅルスと云ふ草で周囲や屋根を葺いて居て、一少部分にウスキーを使つて居る。此様な草葺の蒙古家をヅルスンゲルと云つて居る。

ウスキーの厚さは二分から五分位迄ある。普通二三分に造つてあるが、烏珠穆沁蒙古の如く、テントの中に床がなく地上に其儘にウスキーを敷く處では、五分位の厚さのウスキーを敷いてあるのを見た。

又蒙古人のテントの人口の垂もやはりウスキーで重く厚いものである。巾は二尺五寸位長さ四尺位で、之に馬の尾の糸で蒙古特有の先に寫眞に示せる如き紋様を縫取してある。敷物には駱駝の糸を紡錘したもので同様の縫取をして居る、之等は皆蒙古婦人の手すさびで、靴を手造りするのと同じく實に精巧なるものである。

林西縣では美しい此地獨特の面白い意匠の絨毯を製造して居るのを見た。それは白・黒・茶などの牛の毛を用ひて居て、外に赤、青、黄などに染めた毛を交へてある。此紋様の風影を織り出したものに、恰も私共がワールマンハの永慶陵で、壁畫に見た風景畫に類似して居るのは面白いと思つた。

山水に鹿、雲に鳥など大變興味をひくものである。織り方も密で暖かい、疊一枚位のもので一人で一ヶ月は要する相で、曲尺一尺平方が二三圓の價だと云つて居た。滿鐵會社あたりから絶えず大廣間用の絨毯の注文を受けて、いつも仕事は忙しいとの事であつた。毛皮類や絨毯の類は、内地の税關がきびしいから、うっかり持ち歸つて高價なものになる事がある。

骨董品の如きものも、此地で安價に手に入れても、安東や内地の税關などで、非常に高く見積られて閉口する人もあると云ふ。

此古物の事で、滿洲のある處で聞かされた話であるが、遼代の骨壺を手に入れた方が、之を非常に貴重なものと思つて二重箱に收め、其夫人には『此壺を碎せばお前は離縁だ』と云ひつけて居ると云ふことをきいて驚いた事であつた。此様な骨壺は滿洲の至る處に掘り出されるもので、あまり珍らしいものとも、高價なものとも思はれないのである。まして夫人と取り替へられる程の價値は、たしかにないから安心された方がよい。

林西の街の雜貨類は北平から張家口を通つて經棚の方から來るものと、同北平から熱河

赤峯、經棚を通つて來るものと、錦州から朝陽、赤峯と來るものと、通遼から開魯を通過して來るものがある。之等は大概牛車で運んで來るものが多い、其他大車で運ぶものもある。勞力や日數によつて、自然雜貨類の高くなるのは止むを得ない。北平から張家口を過ぎ烏珠穆沁蒙古に通ずる乗合自動車があるときいた。北平から熱河までも乗合が通つて居る。そして通遼から開魯までと之等の乗合には郵便物や多少の荷物が乗せられて居る。赤峯には日本領事館もあるし、電報も通じて居る。林西にも電報の便があり、郵便物も配達される。日本から林西までの郵便は三四十日位を要する様子である。

林西の街から郵便屋さんが出發して行く姿を見たことがある。それは一人の中國人が郵便の印のある胴着の様なものを着て、驢馬に乗つて居た。そして郵便物は皆馬の腰に着けてある。此様子では一日どれ程も走ることは出來まいと思つた事であつた。まるで昔の飛脚の様な感じはするが然し中國人の郵便物は確實である。

電報は林西、鄭家屯ならば、都合よく行けば大概一日の内か翌日に返電を見ることが出来る。電信、郵便には中國人が従事して居て、あまり間違などは少ない。此奥地で電報を

受取ることの出來ると云ふことは、非常に重寶な事と云はねばならぬ。

荷物の運搬に、林西から通遼に絶えず牛車で往復して居る中國人の運搬業者があつた。私共の多くの採集品を此牛車に托して置いたが、林西から通遼まで二十數日目に到着して居た。そして總べての荷物は完全に、何一つ碎れ物も紛失物もなく運搬されて來た。

此様な商人は充分信用して多くの荷物など托してもよい。只途中馬賊などに襲はれる憂があるがそれは例外である。林西から通遼までは牛車で二十日の豫定であるが、途中雪降り吹雪、降雨、寒氣などの爲に、林西を出發してから三十數日目に通遼に着くと云ふこともある。牛車は案外靜かに荷物を運んで、碎れ物などが一つもなく紛失物もなく完全に運ばれて來るのである。中國人の此様な運搬商人は實に正直なもので、安心して多くの荷物をまかせて置くことが出来る。

之等の牛車は荷車一臺を一頭の牛に牽かせて居る、それでも一臺には四五十貫位までを載せることが出来るし、運賃も安價である。

私共の旅行には大車と云つて大きな荷馬車に手すりの着いたものでアンペラでほろをつ

ける事も出来る。之は又馬を六頭立七頭立にして、一人の御者は一丈餘もある様な細長い棹の先に五六尺の皮紐をつけた鞭で車上から數頭の馬を一頭毎に自由に馭して行くのである。此大車ならば馬賊などに出會ふ事もあり、河の増水など色々の妨げが起るので遅れることは仕方がない。之等牛車の商隊が幾十臺の車を列ねて運搬して行くのを、旅行中に一度見た。彼等は色々様々のものを牛車に載せて居る。中には大きな水瓶を載せて運んで居るのを見た。

私共の旅行に用ひた大車には、數ヶ月分の食料品、例へばメリケン粉、米、鹽、砂糖、醬油其他、テント、大鐵鍋、各自のトランク、寢具などあらゆるものを乗せて、其上に數人の人も乗ることが出来る。重さは五六百貫にも上つて居るであらうと思はれる位、そして此大車はどんな山坂も樂に通過して行くのである。

中國人の農家を便つて旅行を續けて行けば、決して馬料に困る様なことはめつたにないが、蒙古人の村に向ふ時は、之等の農家から馬料を買入れて行かねばならぬ不自由がある。旅行の途中よい牧草の生えて居る處では、馬を休ませて秣かふ必要もある。このやうな大

車は一日百支里位は樂に進むことが出来るが、馬の善惡にもよる。

馬夫達は馬を大切にしてお大變可愛がる。夜中もおち／＼眠むる暇もない位、度々起き出では馬槽に馬料をやつて居る。それで數日毎に一日位馬を休養させねばならぬ。

私共の探査旅行は、いつも考古學上人類學上からの研究で、あまり物資などの方は一向に注意をしなかつた。只漠然と見たまゝ、聞いたまゝを、後の旅行者の爲に何か参考にもと思つて書き綴つて見たのであつた。或は見當違ひや、間違ひはあるかもしれない。例へば十錢のものを二十錢と云はれても安いと思つて買ったこともあるし、二十圓と云はれて十圓に値ぎつて、直ちに負けてくれてびつくりして買つたりした様な事もあるから。

一地方に長く留つて、中國人と同じ様な生活をして居ても、中々眞相は分らないものである。すつかり中國人になりすまして居ても、日本人と分ればやはり中國人と同様の安價では決して車や馬車には乗せないのである。旅行者は支那語に通じて居なければならぬ。蒙古入する人は、蒙古語も多少聞分け得るだけの耳をもつて居る必要があらう。

とにかく此邊を手ぶらで、單獨に旅行しようとするには必らず言語に通じると同時に中

國人の習慣に通じ、高粱ばんに生葱位かぢれる程度に練習が積んで居なくてはならない。私共の探查旅行には鄭家屯の滿鐵公所長で、蒙古學者の聽え高き菊竹氏の手厚い好意に依つて、種々と滿鐵の機關を利用して頂き、かつ同じ方面に遊歴して居られた若い所員の方々の熱心なる助力に依つて、思ひがけない多大の有益な研究を遂げる事が出来たのであつた。

私共は一日も早く平和の日が来る様に祈つて居る。私共の知つて居る限りの中國の學者達は、實に徳の高い學識のある尊敬すべき方々ばかりで、いつでも私共の爲には親切丁寧であつた。又私共の知つて居る限りの農家や苦力達まで、皆無邪氣で正直で質朴な親しみのある人達ばかりであつた。蒙古人も相變らず無邪氣で凡べてが大陸的で中國人と同じ様に日本人とは親しみ易い。一體に中國人も蒙古人も愉快な處があつて、或一部の日本人の様に陰氣でない。自國の文明に自惚れないで、隣國の同胞を尊重して、大に學ぶべき點が少なくはあるまいかと思はれる。どうしても日本は早晩中華民國の人々と共に協力して、極東の發展進歩を計る様になる時代が來なければならぬ。

跋

あの曠漠たる平野に横つて居る無盡藏の資料に、私共は絶えず限りなき懐しみと魅力を感じて居る。されば踏査への旅立は、まるで故郷へでも歸つて行く様な氣持で、勇み進んで行く。そして次から次へと興味溢れる發見に、私共の研究熱は何處までも止度もなく燃えて來るのである。でも今少しと思ふ時いつも定まつて旅費が缺乏して居る爲多くの希望を残して歸つて來るのが常である。こんな時亞米利加あたりの探險隊が羨ましくてならない。それは夫一人分のもので、必要上二三人の助手が従はねばならぬから止むを得ない。もしも之迄の研究旅行に充分の調査費があつたならば、夫をしてどんなに多くの研究の上に大成功をさせて居たであらう、と思ふ度に私はほんとに遺憾に堪へない。

然し又一方には私共の調査旅行の上に多大の同情を寄せらるゝ公私の方々から少な

からず色々の便宜を與へられて居る事を忘れる事は出来ない。分けても在滿蒙の我同胞諸氏の厚き御盡力によつて、私共はいつもながら意想外の收穫を與へられて居る賜のあることは、眞に感謝おく能はざる處である。

私共の踏査旅行は、調査以外に一日中の研究を出來得る限り詳しくノートする事が一番大切な仕事で、特に私は夫の助手として調査の傍、スケッチ・拓本・測定と寫眞と、忙しい外尙一物も見逃さない様に書き止める事であつた。然し此處には其概略を記して置いた。更に論文や寫眞版として今取掛つて居る最中である。

兎に角、簡単な旅行誌ではあるが、幾分なりとも世を益することが出來れば此上もない光榮と云はねばならぬ。私は此拙い一文を書して跋とする。

昭和六年十二月三十一日

鳥居人類學研究所にて

鳥居きみ子

跋

昭和七年一月十五日印  
昭和七年一月二十日發行



滿蒙を再び探る

定價金貳圓五拾錢

著作者 鳥居龍藏

發行者 鹿島佐太郎  
東京市神田區多町二丁目一五

印刷者 山縣精一  
東京市神田區今川小路一ノ一

發行所

東京市神田區多町二丁目一五  
六文館

振替・東京七八八四番

山縣精一印刷株式會社印刷製本

# ◇六文館發行圖書目錄

東京・神田多町二丁目一五  
振替・東京七八八四八番

國語學通考	臺北大教授 安藤正次著	菊判四三〇頁 クロース裝函入	定價三圓五十錢 (送料廿一錢)
思想を中心としたる 中世國文學の研究	成蹊高校教授 阪口玄章著	菊判三二四頁 クロース裝函入	定價二圓五十錢 (送料廿一錢)
國學發達史	文學博士 清原貞雄著	菊判四三二頁 クロース裝函入	定價三圓
日本傳説研究全六卷	藤澤衛彦著	四六判各四百頁 口繪各冊四枚 クロース裝函入	各冊二圓五十錢 (送料廿一錢)
藝術的現代の諸相	板垣鷹穂著	菊判四〇〇頁 寫真口繪二四頁 華麗特裝本函入	定價二圓九十錢 (送料廿一錢)
増訂近代美術史潮論	板垣鷹穂著	菊判二四六頁 挿繪一四五枚 ポプリン裝函入	定價四圓八十錢 (送料卅三錢)
文學と經濟學	大熊信行著	四六判三一八頁 クロース裝函入	定價一圓八十錢 (送料十五錢)

神道の宗教學的新研究	文學博士 加藤玄智著	四六判四五六頁 クロース裝函入	定價二圓九十錢 (送料十五錢)
改訂土俗學上より觀る蒙古	鳥居文學博士 鳥居さみ子著	菊判一六〇頁 寫真版一〇四葉 クロース裝函入	定價六圓五十錢 (送料卅三錢)
體育ダンス提要	成蹊高校教授 下間芳克著	菊判一七四頁 曲譜別刷三八頁 挿圖五二個布裝	定價二圓二十錢 (送料廿一錢)
國文學襍説	浦和高校教授 藤田徳太郎著	菊判四〇六頁 寫真口繪四葉 クロース裝函入	定價三圓五十錢 (送料廿一錢)
滿蒙を再び探る	文學博士 鳥居龍藏著 鳥居きみ子著	四六判三九六頁 寫真口繪八頁 華麗特裝本函入	定價二圓五十錢 (送料廿一錢)
建築十都市十現代	藏田周忠著	近刊	近刊
藝術界の基調?—に答へて	板垣鷹穂著	近刊	近刊
源氏物語書目要覽	浦和高校教授 藤田徳太郎著	近刊	近刊



工 2798

# 日本傳説研究

全六卷

藤澤衛彦 著

## ◆各册

原色版口繪二葉・寫眞單色版口繪二葉  
四六判總ルビ付・クロス特裝函入

定價金貳圓五十錢 (送料各册  
二十一錢)

第一卷	酒類童子物語・人買船・兒が淵・苜荳石童・阿古那姫・眞間の手兒奈 處女塚傳説・白鳥飛來の傳説・渦潮傳説・鶴退治	本文四二〇頁 挿圖八〇箇
第二卷	八百姫と雪女・棄老養老譚・羊太夫・高麗王・羽衣天女・白鳥天女・ 滝恤天女・平將門と七騎陰武者	本文三八三頁 挿圖七五箇
第三卷	月に住む生物・月界の玉兎と勝々山の兎・性的兎の餅搗考・お月さま 童謡考・梟の鳴聲と其譚叢・梟の寒がりと獨りぼつちの傳説・百合若 大臣・巨人傳説考・辨慶物語・世界巨人考	本文三五四頁 挿圖六六箇
第四卷	道成寺濟姫譚・蛇性考・雷の臍取譚・菅公怨雷考・不死鳥譚叢・穴無 し小町考・小人傳説譚	本文三八六頁 挿圖九九箇
第五卷	梅若塚の柳・七夕二星の傳説・鶴橋考・葛の葉物語・人獸交婚考・玉 藻前の傳説・妖狐考・百足山秀郷譚・龍宮傳説考・浦島太郎譚・仙卿 淹留傳説考・妖術者の群	本文四二五頁 挿圖一〇〇箇
第六卷		

二月 出 來





